自由な転生者

ダクトさん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公　トクロは変な白い空間に呼び出され、五つの特典をもらいさまざまな世界に行き仲間を集め、時には戦う、自分のしたいことをするために

目次

プロローグ ―― 1
ハイスクールＤＸＤの世界
いざ、ハイスクールＤＸＤの世界へ ―― 4
仲間（家族） ―― 7
戦いの準備 ―― 10
激突（笑） ―― 13
一人のドラゴン ―― 16
起きました ―― 20

プロローグ

「・・・・・ここは？」

俺は辺りを見回してみると辺り一面真っ白だった。

まさか、夢！

「夢ではありませんよ」

!!!

後ろを振り返ると白い靄に包まれて見えないが誰かいるのが分かった。

「お前は、誰だ？」

「神です」

「神だ（笑笑）」

まさか、二次創作でいう神か！　　イヤないな

「信じてませんね」ムカ

「そうりゃあ普通そう思いますよ」

「いきなり現れて神ですってねー」

それが普通だ　　俺は悪くない！

「貴方が誰か聞いてきたから‼？」

「ハイハイ、でその神様がなんで目の前にいるの？」

それが疑問だった。たしか、俺は家で、寝てたんだと思うけど

「その前に自己紹介してくださいね～～」ニヤ～

ムカ　まあ早く進めたいしここは我慢。

「俺は、　・・・・・トクロと呼んでくれ。　歳は１６だ。」

「なぜ、本名じゃないんですか？」

「プライバシーの侵害だ！」キリ！

ムカ「まあいいでしょう」

「では、　　私は、神です　姿はこの通り見えませんがご了承ください。」

そのままじゃん　まあいいここからが本題だ

「神様　なんで俺はここにいるんですか？」

まあ、神様がなんかしたんだろうけど

「最近面白いこと（暇だから）がないから、平和な世界の人を攫～・・
ごほん呼んで特典与えて二次創作みたいに好きな世界に招待しようとしたわけです。」
今、何気に攫うって言わなかった！
「一応、拒否権ありますよ」
さて、どうしようか？
「ちなみに特典は、幾つあるの？」
「5個でお願いします。　多少チートでもいいですよ。」
う～ん迷うなー
３０分後
よし、決まった。
「神様決まりました。」
「ようやく決まりましたか」
「まず一つ目は、俺の好きな仮面ライダーに変身できる能力で。」
「もちろん、最強形態まで変身できるように」
「好きな仮面ライダーとは、？」
「カブト、オーズ、鎧武で」
「分かりました」
ヤッホー　ちょっと憧れてたんだけよな　さて
「二つ目は、ハイスクールＤＸＤのロンギヌスの神器全てで」
「三つ目は、転移の究極版で」
「究極版とは、？」
「色々な世界に行けるようにもちろん俺が望んだ世界でなおかつ望んだ場所、時間に行けるようにしてください」
これは面白いですね
「分かりました」
「四つ目は、拠点が欲しいので異次元に家を作って自由に出入り出来るようにしてくれ」
「五つ目は、いままでの特典に完全に耐えられる体にしてくれ」
「この五個でいいですか？」
「ああ　　」

「チートですね～　まあいいでしょう。」

すると、俺の体が光って力が湧いてきた　たぶん、特典に耐えられる体になったんだろう

なんの世界に行くか、楽しみだな

ハイスクールＤＸＤの世界
いざ、ハイスクールＤＸＤの世界へ

「さて、次はどの世界へ行くか決めてもらいます」
「なんでもいいんですか」
「はい　だいじょうぶです」
　これは迷うな　でも、一応あるていどしたら他の世界に行けるし
どうしようか～　うん決めた
「決めました」
「どこですか？」
「ハイスクールＤＸＤの世界で」
「それは、なぜ？」結構、危険だと思うんですが？
「一人だと心細いんで仲間づくりにチャレンジしようかと。」
　まあ、面白そうだからいいでしょう
「分かりました」
「容姿は、どうしたらいいでしょう？」
「普通でちなみに歳はそのままで独り暮らしで」
「どうしてでしょう　転生の方が家族もいますよ」
「母乳プレイとかヤダし、危険とかありそうだから」
　はぁー悔しそうにしてるの見たかったんですが
「今、残念がってませんでしたか？」
「ソンナコト　ありませんよ」
「分かりました（絶対思ってたな）」
「そういえば、特典の拠点を持っていますが、一応普通の家も用意しときますね。」
「分かりました（内心どうしようか迷ってたところだった）」
「一応、拠点の方は、私好みにしますね、オマケもつけますから」
「・・・・はい。（オマケはなんだろう？）
「では、逝きますよ」
「なんか字が違う」と言った瞬間、穴が空いた俺の下に

「まいどお馴染みのやつかーーー」そのまま落ちていった
「さてあの人も後から送れば準備完了！」
トクロさんあなたの行く末に祝福を。

「　　ハァーよく寝た。」とベットからでようとしたら周りがかわっていた。
そういえば、転生したんだったなと思って机の上にある手紙を見つけた。
中身を見ると
ごきげんよう
君を転生させた神です
無事に転生できたようですね
さて、こうして手紙を書いたのは言い忘れたことがあったからです
まず、一つ目　拠点への入り口の開き方は「オープン」と念じれば入り口が開きます
二つ目は、君の容姿はソードアートオンラインの桐ヶ谷和人の髪の色が茶色バージョンにしてみました。
知ってる身にしたら違和感ありまくりだろ
三つ目は、現在君が住んでいる場所は、主人公の兵頭一誠の家の隣です
時期は、まだ原作の一か月前なので慌てなくてだいじょうぶです
ちなみにちゃんと引っ越し祝い持っていってね通帳は０がたくさんあるからだいじょうぶ。
手紙の裏に通帳があった
「(隣とか引っ越し祝い持って行かないと行かないな)」
あと、特典のベルトとオマケの武器、サポート武器、バイクは拠点にあるから見といてね　　ｂｙ神（オマケはまだあるよ）
オマケとして武器やサポート武器、バイクとかいいものくれるじゃんそれに、まだあるんだ太っ腹だな
さて、引っ越し祝い買って兵頭家に行ってみるか
家の前まで来てインターホンを押す

「ピンポーン」
「はーい」
　すると、中から茶髪の青年がでてきた　多分この人が兵頭一誠だろう
「あのーどちら様で？」
「今日引っ越してきた織泉　徳呂と言います歳は１６歳でアルバイトして暮らしています　これはつまらないものですがどうぞ」
　そう言って買ってきた饅頭を渡す
「ああ、どうもありがとうございます　俺は兵頭一誠です気軽に一誠と呼んでください」
「ああ、ありがとう一誠」
「じゃあ、こっちもトクロと呼んでくれ」
「おう　トクロ　ところでエロいことに興味はあるか？」
「一応、あるぞ」
「じゃあ、今から鑑賞をしないか？」
「悪いがまだ準備に忙しいんだすまないな」
「いや、だいじょうぶだ　いつでも来ていいからな」
「・・・ああ、遊びにくるよ　じゃあな」
「おうまたな」
　家に戻ってきて
「さて拠点に行ってみるか」

仲間（家族）

引っ越しの挨拶が終わって家に帰ってきた。そしたら、リビングの方から「お帰りどこに行ってたの？」
「どこって、引っ越しの挨拶しに・・・」あれ、俺誰に返事したんだ？
そう思った瞬間慌ててリビングに入った。すると、俺に似た姿の青年がいた。
青年は、「どうしたそんな慌てて」首をかしげてた
「まず、知らない相手に自分家に不法侵入したら慌てるだろ」１１０番するか？
「分からないのか？オレだよオレ！」
「もしもし、警察ですか？今、不法侵入及びオレオレ詐欺をした人がいるんですが。」
「おい？俺だよ前世でぐーたらしてた人の弟だよ」
誰がぐーたらだ！
「スミマセン、至急来てください！場所は　」
「スミマセン、イケメンのお兄様」
「キモ」鳥肌がたった
「あんたが言わせたんだろ！」
キモかったんだから俺は悪くない
「で、なんでお前が居るんだ尚紀？」神の仕業か？
「それは、今から１０分ま・・」
「三行で！」長くなりそう
「神に拉致られて
特典もらい
ここに来た」
「ＯＫ？」
「ＯＫ！」グッ
「それでお兄様ここはどこ？」
「お兄様止めろ　トクロと呼べ！」やべ寒い
「で、ここはどこ？」一矢報いた

「神から何も聞かなかったのか？」
「「トクロを転生させた　特典あげる　行ってらっしゃい」しかなかった」
「そっか、ここはハイスクールＤＸＤの世界だ」
「そっかーって死亡フラグたつ世界じゃん！」
「だって、仲間が欲しかったから」強いし
「まあ、そうだけどそういえばトクロは特典何貰ったんだ？」ワクワク
「俺は五つの特典（以下略）だ」ドヤ～
「ハッなんだって俺なんか一つだぞしかも、ウィザードの変身ベルトだぞトクロとは全然違うじゃん」あの神ー！
「まあ、過ぎたもんは、しょうがない　今から「拠点」に行くけどいくだろ」
「行く」
「じゃあ、行くぞ「オープン」」
　すると、拠点への入り口ができ中に入っていった
　中に入ると、リビングらしくテーブルの上に俺たちの特典カブト、オーズ、鎧武変身ベルト、武器の数々があったそして、また、手紙があったので読んでみる
　トクロへ
　弟さんにも無事会えましたね、そして、特典の方ですが貴方の特典に力を使い過ぎたので一つになってしまいました
　でも、ガレージにバイクの他にガチャを設置しました。
　このガチャは、貴方たちが私にとって面白いことをするたびにそれぞれ1回回せるので頑張ってください
　また、特訓などのために無限に食材が出る冷蔵庫に風呂、精神と時の部屋を作りました。
　後、一つ特典のオーズに関してセルメダルは、自分でなんとかして下さい（疲れました）
　では、良い戦いを！　　ｂｙ神
　グシャ　ボオッ　丸めて燃やす　特典に関してはいいなんとかなるからだ

だが、俺の所為で尚紀の特典が一つになったので証拠隠滅を図る。
「フーこれでだいじょうぶだ」
「何がだいじょうぶなんだ？」
後ろから尚紀が来た
「ああいやそのね・・ガレージにガチャができて神様にとって面白いことをしたら一回ずつ回せるんだって」汗　タラタラ
「よっしゃーなら頑張るぞ！」
「そうだな」
「トクロそういえば、特訓場みたいな所があったんだけど？」
「ああ、それは精神と時の部屋らしいぞ」
「マジ、じゃあ俺と試しに模擬戦しようぜー」
「分かった。先行っててくれ」
「分かった」そうして、尚紀はリビングからでていった」
・・・・とりあえず特典使って戦う（遊ぶ）か！

戦いの準備

精神と時の部屋らしき部屋に入ってみた。
中は、ドラゴンボールみたいに建造物はなく、ただ果てしなく広かった。
トクロ「広いなー　先が見えないなー！」不思議な感じだ
尚紀「早く模擬戦しよう！」ワクワク
トクロ「その前に、特典の把握をしないと模擬戦はそれからだ」これだからお子ちゃまは　ハァ～
尚紀「いま、なんかムカついた」バカにしたな！
トクロ「・・・とりあえず、離れて把握しよう」この世界だと相手の考えが分かるのか？
・　・
・
トクロサイド
さて、どうするか、模擬戦とはいえ負けたくないな
トクロ「ひとまず、神器を試してみるか」
「赤龍帝の籠手」
すると、左手が赤い龍の手になった
「これは、・・かっこいい！」と興奮していたら籠手から
??「よろしく、私のパートナーさん」と声が聞こえた
トクロ「お前、もしかして、ドライグか？　でも、女だし・・」
ドライグ「あら、女だったらなんか悪いの？」
トクロ「まあ、色々あるだろ」生活する時に恥ずかしいし
ドライグ「だいじょうぶそんな時は、奥の方に潜っとくから」
結構親切だな
トクロ「ドライグはなんでいるんだ？しかも、性別変わってるし」俺が今代の赤龍帝か？
ドライグ「それは、私は、神によって作られた本物のコピーみたいなものよ・・・」

なんか地雷踏んだな
トクロ「ということは、アルビオンもいるのか？」
ドライグ「いいえ、「白龍皇の光翼」も私が宿っているから」
あとで、ドライグと話をするか
トクロ「さて、引き続き確認するか！」
サイドアウト
・
・
・
さて、一通り終わったし尚紀を呼ぶか
トクロ「尚紀、そろそろ模擬戦するぞー」
尚紀「分かったと言っても、俺一つしかないからだいぶ前にもう終わってたんだけど」
トクロ「それはすまん、さてやるか」
尚紀「よし」グッ
トクロサイド
トクロ「来い、カブトゼクター」ベルトを着けて、手を掲げてそう呼ぶと、カブトゼクターが飛んでいき手の中におさまった。
トクロ「変身」
「ＨＥＮＳＩＮ」と電子音が聞こえるすると鎧を身に纏う
トクロ「からの「キャストオフ」」鎧が弾け飛びスマートな体型になる
トクロ「さあいくぞ」
サイドアウト
・
・
・
尚紀サイド
手に指輪をつけ、腰の位置にかざす
「ドライバーオン」電子音が聞こえベルトを
「シャバドゥビタッチヘンシン　シャバドゥビタッチヘンシン」

尚紀「変身」また、別の指輪をかざす

「フレイム　ヒー　ヒー　ヒーヒーヒー」

尚紀「さあ、ショウタイムだ」指輪の魔法使いに変身する

サイドアウト

神速のライダーと指輪のライダーが今、激突！

激突（笑）

トクロ「まず、先制攻撃、クロックアップ！」
その瞬間、トクロの体がブレ、尚紀は吹っ飛ばされた
尚紀「ッが！」
トクロ「やっぱ圧倒的だなｗｗｗ」テンション上がる～！
尚紀「く　やったな！　」尚紀は指輪をつける
「フルパッチマジックタッチゴー　フルパッチマジックタッチゴー
クロックアップ　プリーズ」その瞬間互いに速さは同じになった
トクロ「そんな指輪ねーだろ！」カブトの専売特許だぞ
尚紀「あったんだからいいんだよ」
トクロ「たっくこれじゃあラチがあかない」と言う
すると、トクロは変身を解き、3枚のメダルとベルトを取り出し、ベルトは腰につけ、メダルを入れる
トクロ「変身！」そのまま、オーズスキャナーをスライドさせる
「タカ　トラ　バッタ　タットバ　タトバ　タットバ」
トクロ「オーズで勝ってやる！」
そう言いながらメダジャリバーを取り出す
尚紀「それはこっちも同じだ！」
指輪をつけ変えベルトにかざす「コネクト　プリーズ」
尚紀は、出現した魔方陣に手を伸ばし、ウィザーソードガンを取り出すと同時にガンモードで撃っていく
尚紀「ほら！」
トクロ「ちょっと待って！」
トクロは慌てて避けたりするが弾は外れることなくトクロを追う
トクロ「やべ！　　そりゃ　　あ痛！」
トクロは弾をメダジャリバーで斬ろうとするが、何発か被弾する
尚紀「次で決める！」
ウィザーソードガンをソードモードへ変える
「キャモナスラッシュ　シェイクハンドキャモナスラッシュ　シェイクハンド　フレイム　スラッシュストライク　ヒーヒ　ヒー」指輪を

ウィザーソードガンにかざす
トクロ「それは俺のセリフだ！」
トクロは、３枚のセルメダルを取り出し、メダジャリバーに入れて
オーズスキャナーをメダジャリバーにスライドさせる
「スキャニングチャージ」
トクロ「せいやーー！」
尚紀「はーー！」
ギャリィーーーーーーーン
互いの剣がぶつかる　ほぼ互角
そんななか
トクロ「赤龍帝の籠手　　白龍皇の光翼」「Ｂｏｏｓｔ　Ｔｒａｎｓｆｅｒ　　Ｄｉｖｉｄｅ」
そして、瞬時に倍加して譲渡し、半減させメダジャリバーは威力が倍加し、ウィザーソードガンの威力は半減した
「ドゴーーーーーン」
結果、尚紀は斬られ変身は解かれトクロの勝利になった

トクロ「フー　危なかったな」
もし、自分が最後赤龍帝の籠手と白龍皇の光翼を発動させなければどうなっていたかわからなかった
トクロ「今後は、特訓しよう！」
そう心に誓うトクロだった

？「この気配は、・・・・ドラゴン？」
？「ドライグ？でも、変な力感じる。」
？「この力　グレートレッドに有効そう。」
？「会いに行く。」
てっ　てっ　てっ　てっ　てっ・・・・・・・・

トクロ「ぶるっ　ナンダか変な気配が・・・気のせいか。」
「さて尚紀を起こすか。」
そうして、倒れている尚紀のもとへ行くのだ

一人のドラゴン

倒れている尚紀のもとへ来た
尚紀「ぐーぐーｚｚｚ」
なんか寝てるし！イラ！
俺は、煌天の雷獄（ゼニス・テンペスト）を発動させ雪を降らせた
雪を降らせた結果、気温が下がり尚紀は寒そうにするがまだ起きない。
トクロ「さっさと起きろ！」ゲシ
尚紀を蹴ってやった
尚紀「痛！何すんだよ！」
と、飛び跳ねて起きた。
トクロ「こんな寒いなか寝たら風邪引くから起こしてやったんだ。」
感謝したまえ
尚紀「えっありがとう・・じゃあなくて普通精神と時の部屋では、雪は降らないから。大方、煌天の雷獄で雪を降らせたんだろ。」
トクロ「正解ー！花まるをあげよう。」
尚紀「いらん。それよりも腹が減ったから帰ろう。」ぐ～
トクロ「・・・それもそうだな」
ということで俺たちは、精神と時の部屋から出た。
・
・
・
・
トクロ「ハァー満腹。」
精神と時の部屋から出た後晩御飯を作ろうと拠点の台所に行くと冷蔵庫は大きく設備も揃っていたので、簡単にカレーですました。
尚紀「先に風呂に入るね。」
トクロ「ああ、いいぞ」
そう言うと尚紀は風呂場に行った。

トクロ「さっき、俺も拠点を見て回ったけど豪華で無駄に部屋も多いし、しかも、ゴミ一つ落ちてないどんだけなんだ。」まあ、掃除する手間が省けるからありがたい。
トクロ「さて、尚紀がいないうちに」
トクロは、精神と時の部屋に入った。
トクロ「赤龍帝の籠手」
左手に赤い籠手を纏った。
トクロ「なあ、ドライグ」
そう呼びかけると籠手の宝玉が光って
ドライグ「どうしたのトクロ？まさか、夜這いならぬ夜び出し！いやでも神器と主だしでも私はそれでもゴニョゴニョ・・・」
なんか言ってるけど最後の方が聞こえない。
トクロ「とりあえず冗談はそこまでにして。」
ドライグ「・・・・・・」
なんか籠手の宝玉が黒ずんでるような
トクロ「ドライグさあなんか落ち込んでるいるように見えるんだけど。」
ドライグ「　ッ！」
やっぱりか
トクロ「なんで落ち込んでるんだ？」
ドライグ「・・・・・・・・・」
俺の予想だけどおそらく
トクロ「自分がコピーつまりニセモノだからか。」
ドライグ「　ッ！」
トクロ「分かるよ　俺も自分がコピーだったら泣き叫んでいるかもしれない」
ドライグ「黙って。」
黙ってと聞こえるけど続ける。
トクロ「しかも、コピーとはいえ二天龍の片割れ　赤き龍の帝王ドライグ・ア・ゴッホだもんな。でも、誇りや経験今まで自分がしてきたことさえもコピーなんだからな」

ドライグ「ダマレェェーーーーェ！」と、同時に籠手の宝玉から凄まじい光が溢れトクロの前に赤い龍が現れた。でも透けてるところを見ると実態がないようだいわば魂が具現化したようだ。
ドライグ「貴方に何が分かる自分の持ってるいる全てが他人のものなんだぞ私自身が成し遂げたものなんて何一つない！」
トクロ「ハァー　別にいいじゃん。」
ドライグ「なんですって！」
トクロ「俺だって特典として色々なものをもらってんだから」
ドライグ「そうだとしても貴方はまだこれから色々なことを成し遂げられる実態のない私ではもう何もできやしない！」
だんだん泣き声になってくる
トクロ「ハァー。」
ドライグ「何ため息吐いてんですかー！」
トクロ「そんなんだったら俺と一緒に成し遂げようと思わないのか？助けてと言えないのか？」
ドライグ「　ッ！」
トクロ「言えよ誇りなんて全部捨てて一人の女ドラゴンとして泣いて助けを求めろよ！」
ドライグ「うう　　助け・・・て
ドライグ「助けてよ！」
トクロ「ああ任せろ！」
すぐさま行動に移る
まず、魔物創造（アナイアレイション・メーカー）を発動させイメージは輝かしい赤い龍、本物やグレートレッドよりも綺麗な赤だが魂の入ってないドラゴンを作るのは簡単だが体がドライグに耐えられないだから俺の命を魔物創造のエネルギーに変え出来た、ここで幽世の聖杯（セフィロト・グラール）でドライグの魂を籠手から取り出しドラゴンに移した。
すると、赤い龍は光を放ち光が止むとそこには、輝かしい光を放ち綺麗な赤いドラゴンがいた。
トクロ「綺麗・・・・だ。」そう言うと俺は意識を失った。

・　・　・
ドライグサイド
トクロに私を作ったドラゴンに移され目を開ける
トクロ「綺麗・・・だ。」と言われ「ドキッ」としたら急にトクロが倒れた。
ドライグ「トクロー！」慌てて駆け寄った。
でも、この姿じゃあトクロの容体を確認しづらいそう思うと体が光り人の形になる光りが止むとそこには綺麗な赤い髪に小柄な顔胸はＣカップ位、足はスラリとし、身長は１７０ｃｍの美少女が出来た。
そして、すぐさまトクロ抱き起こす、息はしているようで小さな寝息をかいている、安心はしたが自分がトクロを抱きしめている事に気づき、慌ててトクロを投げ出そうとする動作をなんとか止め、結果、膝枕状態になった。
たかが、膝枕ごときでと理性は思っているが体は、バクバクと心臓がなり響いていた。そして、ようやく自分がどうしてこんなになっているのか分かった。自分は、この青年トクロが好きなんだと。さっきまで、散々コケにしてくれて、今思えばトクロなりに私の事を助けてくれたんだと思う。
トクロの寝顔を見ると自分の心臓の音が速くなり、体が熱くなるだんだん顔が近づいていくがキスするかしないかの寸前でなんとか止まり慌てて顔を引き離す。また、顔が真っ赤になるとともにトクロが起きたらこの気持ちを伝えようと心に誓うのだった。

起きました

俺は、深い眠りから覚めた（大げさ）笑笑。
まず、自分がいるへやを見回す。どうやら拠点じゃない方の家の部屋らしい。しかも、窓からは、朝日の光が通っている。
トクロ「ふぁぁぁ～あの時少し無茶したみたいだな」まあ命を少し削ったから寿命が減ったなだが、仙術を覚えれば生命力を活性化させ元に戻るだろう。悪魔に転生するという手もあるが却下だ。
そもそも、原作を読んで悪魔の印象が嫌いなのだ。特に無理矢理眷属にするなんてゲスの極みだろ。
トクロ「そういえば、ドライグはどこに行ったんだろう？」
まあ、せっかく自由に慣れたんだし元気にしてるだろう
トクロ「さあて行くか！」
そうして、リビングに向かった。・・・
リビングでは朝ご飯を作ってるようだった
トクロ「おはよう。」
？「おはよう」
そう声をかけたが返ってきたのは赤い髪のすらりとした美少女が返事をした。
一瞬、惚けたがすぐに誰か分かった。
トクロ「ドライグか？」
赤華「ドライグじゃなくて今の私は、新しい一人の女として生まれ変わった「紅　赤華」よ！」
ちょっと怒った口調で言われたがちょっと可愛いかった
トクロ「ああ・・って人化出来たんだな」
赤華「試したことがなかったけどなんかできたのよね、そのおかげで膝枕できたし　ゴニョゴニョ／／」
最後の所聞こえなかったけどまあいっか。
赤華「それよりも朝ご飯にしましょう・腕によりをかけたの！」
トクロ「ああ尚紀も起こさないと。」
尚紀「もうとっくに起きてる。」

いつの間にかちゃっかり席に座っていた。
尚紀「普段コーヒーなんて苦いだけなのに今はめっちゃ飲みたい。」
スゥー
なんか尚紀が一人でコーヒー飲みながら黄昏れてる
そして、赤華が作ったご飯（米）、鮎の塩焼きに味噌汁を食べた。
トクロ「見事に日本らしい食事だな。モグモグモグモグモグモグモグモ
グモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグモグ」
尚紀「モグモグ言い過ぎ！」パク
赤華「どう？」ドキドキ
トクロ「美味しいモグモグモグ」
尚紀「うん美味しい」パク
赤華「よかった」ホッ
トクロ「ごっくん　さて今日はどうするか。」ウーン
ピンポーン
突然、来客が来たと
トクロ「だれだ？」
赤華「さあ？」
尚紀「トクロ出てきて」
トクロ「エェー」
ピンポーン　ピンポーン　ピンポ　ピンポ　ピンポ　ピンポーン
トクロ「はいはい分かったからこのままじゃ下ネタぎみになる」
玄関に行きドアを開ける
すると、居たのは
オーフィス「お前誰？」
無限の龍神さんもといウロボロスドラゴンがいました